

インタビュー「おこしびとに聞く！」

2018年8月30日（木）



——本日はお忙しいところお越しいただき、ありがとうございます。先ほど写真撮影をしていて、全員女性だったのでびっくりしました。古くからいらっしゃるライターさんをご存じだと思いますが、昔の社員はほとんど男性だったのです。この数年で女性がずいぶん増えて、社員もずいぶん変わりました。

特に若手社員からはテープ起こしを長くやっていらっしゃる方のお話を伺いたいという希望がものすごく多くて。当社は半世紀以上の歴史がありますので、それを知りたいという気持ちもあると思います。また、ご存じのとおり、テープ起こしは大変な仕事で、起こされているライターの方もそうですし、校閲している社員も大変です。なので、やはり性に合うというか、好きでないとやってられない仕事だと思うのです。

そういう意味で、長くやっておられる方のお話を伺って、自分の仕事への誇りというか、そういったものを培いたいというのがあります。時代が変わり、テープ起こしのやり方自体は変わっても、変わらないものといえますか、テープ起こし自体の魅力や根底に流れるものをお伺いすることで、若い社員も誇りをもってこの仕事に取り組んでいってくれると思います。

昔の楽しいお話を伺えればとも思いますし、テープ起こしへの思いもお伺いできるとありがたいです。社員にも非常に力を与えるものだと思いますので、本日はどうぞよろしく願いいたします。

——座談会の趣旨ですが、事前にお配りしたとおり、社内報の企画の一つとしてやっています。2015年9月に第1号が発刊されたんですね。ライターの皆さんは普段一人で仕事をしていて、あまり相談できる人がいなかったりします。スタッフとの関わりも少ないので、顔が見えるコミュニケーションペーパーを作ろうということで社内報が作られました。

やはり一番気になるのは、もちろんテクニックも知りたいのですが、もっと知りたいのは、他のライターさんが普段どういう感じでお仕事をしているのか。あとは懐かしいお話とか、そういうところは私たち社員も知らないところがあるので、教えていただきたいと思います。

私は入社2年目の尾崎です。今日はどちらかというとな新人ライター的な目線でいろいろ質問できたらいいなと思いますので、よろしくお願いします。

まず、神田さんがお仕事を始められた当時についてお聞かせください。

神田 私はテープ起こしを始めた年数がちょっとはっきりしなかったもので、それほど

古いんです。資料で44年と書かれていて愕然としました。44年もやっているんだと思って、自分自身驚いているんですけども、いまだに奥義を極めることはなくて、分からないことがいっぱいあるので、逆に続けていられるのかなと思っています。今は「猫の手要員をお願いします」と言っていて、そんな程度のお仕事しかしていないので、会社には何も貢献していないんですけど。

——いえいえ、ありがとうございます。神田さんには1年前にも社内報に出ていただいて。印象的だったのが、「自宅でできる、きれいな仕事」という新聞広告を見たのがきっかけということ。

神田 そうなんです。朝日新聞の広告でね。一言抜けているんですけど、その頭に「知的で」ってあったんです。「自宅でできる、“知的”できれいな仕事」って。知的っていうのは、全然知的じゃない人間からするとおかしいんですけど、きれいな仕事で知的ってどういうことかなと思って、興味があって、試験を受けました。

それまではOLを5年間やっていて、27歳のときに仕事を辞めて、いろいろなアルバイトをしていたんですね。そのころはOTCAと言っていたんですけど、今で言うJICAの派遣専門家のお手伝いをしたり、そういうアルバイトをしていたんですけど、家でできる仕事っていいなと思って。

——在宅というと、ほかにもいろいろな仕事があると思いますが、その中でこのお仕事を選んだと。

神田 たまたまなんですが、OL時代に貿易の仕事をしていたのです。そのころはワープロも何もないですから、部長が海外に出張すると、出張したときの報告書を書くための口述筆記をやっていたんですね。そんなこともあって、知的できれいな仕事って筆耕屋さんみたいなものかな、ちょっと受けてみようかなと思ったんです。どういう会社か分からないので、そのときは家人が付いてきました（笑）。年齢的にもう若くもないですけど、女性がそんなところに一人で行って大丈夫かと言って。

それでちょっと不安もあって。でも、まあこういうものだって。新聞の政治欄と三面とスポーツ欄かな。3種類ぐらい読まれるのを書く。それがテストでした。

——そんなテストが。

神田 いまだに覚えているんだけど、濃厚飼料という言葉が「ノウコウヒリョウ」と聞き間違えて、農耕肥料って書いたんですよ。でもそれは餌の方だったんです。日本語って同音異義語がとても多いので、難しいなと思いましたね。

——入社されたのはいつですか。

神田 私の入社は1972年かなと思います。

——うちの会社ができたのが1963年なので、設立して10年経ったか経たないかのくらのときに入社されたんですね。当時のことを知っている人は社内にもいないと思うので、今日は神田さんにしか聞けないことをたくさん伺いたいと思います。

神田 生きた化石です（笑）。

——そんなことないです、いろいろお聞きできればと思います。

音質がよくない場合に気を付けていることはありますか。

神田 特に聞こえるようにするために何かをするというのはないんですけど、聞こえない音にずっとこだわっていると大変なので、とりあえず穴にしておいて、先を聞きます。その先でさっきと同じ言葉をちょっとクリアにしゃべっていたりすることもあるし、全体の流れが分かると、聞こえなかった言葉が聞こえてきたりするので、聞こえない言葉一つにあまりこだわらないで進めています。次の日の朝に聞いたら聞こえたりとかね。席を離れて違うことをしてから聞いたら、さっき何でこれが聞こえなかったのかなということがよくある。だから、逆にあまりずっとそれにこだわって何度も聞かない。それくらいですかね、工夫は。

——そこは私も新人ライターさんに聞かれたことがあります。「効率が上がらないんですけど、ほかの人はどうしているんですか」って。それで、ほかのライターさんに聞いたら、やっぱり同じようなことをおっしゃっていました。自分に合うやり方を見つけるのが、まず新人ライターさんが一番にまずくところかなと。

神田 だいたい1回目はバーッと聞いて、2回目で全部入ったらいいな、くらいで作業する感じです。ほかの話者の方が同じことを言っていたりして、チェックできる、把握できるときもあるんですね。話し方の癖があるから。先を聞くのは絶対に大事だと思う。

——やっぱり何回も聞き直しているというか。

神田 そうですね。立ち上がって席を外して、また戻ってきたり。

——聞き方を変えているとか、1回目はざっと起こして、2回目はちょっとスピードを落とすとか、やり方は変えていますか。

神田 音が悪いときはやっぱりスピードを落としたり、逆に速くすることが結構あります。

——遅くするんじゃなくて、速くするんですか。

神田 速くすると、結構シャープに聞こえるときがあるんです。

——そうなんですね、面白い。

神田 でも、もう聞こえないなと思ったら、諦めるのが大事かもしれない（笑）。ただ、知識があったら聞こえているんだらうなということはいっぱいありますよ。これに精通しているとね。先代社長がいつもおっしゃっていた、「知らない言葉は聞こえない」ですよ。

——名言ですね。

テープ起こしでこれだけは絶対にやってはいけないっていうことはありますか。テープ起こしで、これだけはやってはいけないと自分の中で決めていること。難しいかな？

神田 想像で書いたりしたら絶対にいけないですよ。そのために Google やら何やらを引きっぱなしにするんです。その言葉を引いても出なかったら、その背景の、先生の論文が何かないかなとか。その辺まで引くと意外と出てくるんですよ。ものによっては書くよりも検索の時間の方が長いこともあります。

——いかに検索に時間を掛けられるかということですか。

神田 そうですね。私は検索が大好きなので（笑）。その人が講演会か何かに出ているかなと思うと、そこまで引いたら何か出てくるかなとか。その先生がどこかなとか。言葉だけを引いていても出てこない場合がいっぱいあるので。

話者が分からないっていうときもありますでしょう。あれはもう難しくて。何人もいると分からないですよ。出席している方がちょっと関西弁だったりすると、関西出身の人なのかしらと調べたり。

——すごい。そこまでするんですね。

神田 いや、手掛かりですよ。それが必ず合っているとは限らないけれども、拠り所。その辺が一つのコツかなと思うこともあります。声の特徴をその人の名前の脇に書くんですよ。例えば、知っている俳優の誰かに似ているとか、声質が誰かに似ているとか、脇に書いて。べらんめえ口調だとか、「非常に」をすごく多用する人がいるとか、ちょっと癖があるときにはそういう特徴を書く。

——地道ですね。

神田 あと、発言者が多いときの原稿は確認作業を一気にやります。途中で切れちゃうと誰か分からなくなっちゃう。だから、この時間に集中してチェックしようみたいな感じで、通しでやることが多いです。そうじゃないと、「最初にしゃべった人は誰？」という

ことになる。

——確かに。

神田 昔、エコノミー症候群を発症して3週間入院したんです。そのときも話者が分からなかったんですよね。これは席を外したらアウトだと思ったから、コーヒーとクッキーを置いて朝の6時から夕方16時くらいまでやっていました。それを納めて、さてシャワーでも浴びようかなと思ったら、目の前が真っ暗になって。それでエコノミー症候群で入院したんです。

——大変でしたね。

神田 もう自分の目の前がテレビの真っ暗の画面と同じになっちゃって。なんか息苦しいなと思って、近くにいた義理の姉にちょっと来てもらって、点滴してもらいましょうと病院に行ったら、「即入院です」と言われて、それで3週間。

——怖いですね。たぶんフットペダルもよくないんでしょうね。

神田 結局ね、6時から16時の間、あれを踏みっぱなしだったからいけないんでしょうね。

——あれ、右足で踏んだり左足で踏んだりしています。

神田 同じです。変えないと足がパンパンになりますよね。

——むくみますよね。

神田 血液の循環に貧乏ゆすりがいいって言いますよね。

——ああ（笑）。

でも、3週間も入院？ エコノミー症候群って、そんなふうになっちゃうんですか。

神田 ICUの先生に「明日帰らなきゃいけない。仕事があるんです」と言ったら、「この人帰るって言ってますけど、帰れませんから」って（笑）。

——テープ起こして意外と体力を使いますもんね。

神田 そうですね。私は昔からそうなんですけど、集中しないとできないんですよ。あまり席を立ちたくないのね。音悪を聞くというのは、時には席を立った方がいいけれど、途切れてまた新しい気持ちになると、話から外れるような気がして。

——自己管理が難しいですね。

神田 そうです。こんなことしなくたってみんないい原稿を書いてらっしゃるんだけど、私はわりあい集中しないと駄目な方なので。

——私は違う用事を入れて、意識して立つようにしています。

神田 それが大事なんだよね。気分転換しながらやっている感じですか。

——もっと座ってやっていたいなと思っても、立って別の用事をわざわざするようにしています。

神田 それが大事みたい。

——座るのも体力が要りますよね。じっとする体力というか。

神田 座るのが好きじゃない人はやっぱり続かないと思う。

——確かにそうですね。

いろいろとお話を聞いたんですけど、最後の「新人ライターからの質問」のところでも、腰痛対策などが気になっている人もいますので、また後ほどお聞きしたいと思います。

次に、お仕事を始めて今年で 45 年目ということで、当時の思い出について聞いていきたいと思います。

神田 以前も社内報に書きましたが、私の時はまさに産業革命ですよね。最初はオープンリールで、一言聞いてはガチャッと止めていました。

——大変（笑）。

神田 こんな大きな機械で、テープは円形のリールに焼き込むやつで。映写機にかかるものよりは小さいけれど、大きかったですよね。それを入れて、ガチャッと手で止めて、それで書く。それからカセットテープになって小さくなりましたけど、それでもまだ手ですよね。そのうち、フットスイッチの BM76 を使うようになって。あれもうちに 5 台あった。とにかくテープがよく絡まるんです。

——絡まったり、切れたり。

神田 150 分テープなんて薄いから、音が悪いと足でガチャガチャ踏むからすぐに絡まってね。あれを持って電気屋さんに何度飛んだか。テープですもんね。メンディングテープというものまで買って、切れたらそこを貼って、直しながらやった。

——ネジのやつはいいけど、ネジじゃないやつがあるじゃないですか。あれを開けるのが大変だったんですよね。

神田 そうそう。だからカセットテープのケースも、ネジのものを 2~3 個取っておいて、バリバリって壊して、それをネジのあるケースに移して。

——カセットテープを分解する際に、ネジで止めてあるものであれば外して開けることができるんだけど、熱で接着剤みたいにくっ付いてしまっているものって、バキッと割らないと取れないんですよね。

神田 だから、予備のカセットテープのケースを二つ、三つ持って置いておいて。ネジのないケースはもう箱は壊してもいいと思って。箱を壊して取り出して、手で中を直して移し替える。

絡まったのを直すのも怖くてね。ビヤーツとなったら大変だから。どこでねじれちゃったのか、こうやって探して。直しても、しわの寄ったところはウワンウワンって聞こえるから大変ですもんね。

——戻らなかったことはないんですか。分解したらそのままになっちゃうとか。

神田 それはなかったと思う。でもね、それを直すのに数時間掛かるわけ。もう泣きそうになっちゃう。

——すごく精密な作業。神田さんは手書きから始まって、ワープロになって、パソコンですよ。

神田 だから産業革命（笑）。英雄（HERO）っていう 500 円の万年筆が当時ありましてね、それを 5 本くらい買っておくんですよ。私は特に筆圧が強かったのか、万年筆で書いていると先が駄目になるのね。それこそ 3000 枚の時代だから、ほとんど殴り書きですよ。手書きはひどかったですね。

——大変ですよ。その後、ワープロはわりと普及していたというか、皆さん持っていたんですか。

神田 どうかな。まだワープロが二十数万円のと看で、何か用途がなければ普通の家にあるものではなかったかもしれない。

——それをお持ちで。

神田 それでこういう大きいフロッピーディスクです。

——ペコペコする薄いやつですよ。間に入れる。

神田 だから締め切りはあれを持って走るといふ。フロッピーディスクをカタカタいわせながら、家から駅まで走ってましたもんね。締め切りに間に合わないと大変だから。

——神田さんのころって研修会とかはあったんですか。

神田 ないですね。

——どうやってお勉強されていたんですか。

神田 さっきの話じゃないけれども、会社のドアから入るときに「私はばかなんだ、私はばかなんだ」って二度くらい思わないと、打ちひしがれて帰ることになる（笑）。手書きだったものですから、「ちょっとここへ来て。トブって字、どういう書き順で書いて



る？」と言われて書いたら、「ああ、だからこういう形になるのね。正しくはこう」と言われて。

——校閲者にですか。

神田 ええ。でもね、ありがたいことがいっぱいありました。そういうことで学んできたことがいっぱいあったので。きっと仕事が嫌いだったら続けられないんでしょうけれど、みんな言われているんだからしょうがないなと思っていた。

ただ、校閲がゆっくりの人がいたりして、夕方友達と約束していてもなかなか終わらないので、ああ、むこうを向いている間にもう1枚いけるのになあ、なんて思って。終わった分をこうやって取っていくのね。「こんなにあるのにまだ1枚……」って。そういう悲しさはいっぱいありました。

——ひたすら待つんですね。実践を積まれていく中で、いろいろとご自身で発見していった。

神田 そうですね。書いている方が、発言者のことを「うーん、いいこと言ってる」とかおっしゃっているのね。えー、それよりも早く字を見て！ とかって思って。

——感想なんか。イライラしますね、それは（笑）。

神田 そうそう。そういうのが一番つらかった。「そうだよなあ」とか言って。いや、そうじゃなくて、早く見てって。そういうことはありましたね。

——校閲者は厳しかったですよね。

神田 基本、厳しい方ばかりでしたね。柳井さんも（笑）。

——私はもう、それよりあとの時代になりますから。

——厳しく言ってくれたからこそ、勉強になったというのもあるんですね。

神田 それはもう確かに。言ってくれたというか、もう原稿が真っ赤になったから。それで、それを自分で直したから勉強になったんですよ。今も悪いところがあったりするといろいろ戻ってはきますけど、やっぱり直さないと素通りになりがちですもんね。

——興味を持つことと、もっとうまくなりたいという気持ちが大事ですね。

神田 もっとうまくなりたい。でも、極めることはない。

——そういう謙虚な気持ちもまた大切なのかもしれません。ライターさん一人でやっている仕事ですが、校閲者とペアで補い合いながら一つのものを作って納品しているので、音悪で分からない言葉があっても、それは校閲者に託して、一緒に共有できたらいいなと思います。

新人の方には校閲者から比較文書を送ったりして、フィードバックはしているんですけど、神田さんは経験がすごくおありなので、逆に校閲者への意見などがあつたら言ってもらえたらと思います。今後も一緒により良い原稿を作っていけたらと思うので、これを機にまたよろしくお願いします。ありがとうございました。

神田 ありがとうございました。

